
有料彼氏

真澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有料彼氏

【Zコード】

N1826V

【作者名】

真澄

【あらすじ】

「お金あげるから、わたしの恋人になつてよ」。わたしの彼は、30万円。二人の関係は、1ヶ月だけのもの。どこまで本当にどこから嘘か、わからないけれど、彼は今日もささやいてくれる。好きだよつて。

一話ずつ交互に視点が変わります。

仕事はある。
金もある。

趣味は大していない。

友だちはいる。

恋人は、いない きっと、これからも。

欲しいような、こりなこのような。面倒くわこよくな、たみしこよう
な。

最終的に金で解決だなあ。会いたいときだけ現れてくれる、都
合のいい彼氏。お金払って雇えるもんなら雇つての。

夜中のコンビニのATMでお金を下ろす。銀行に行くヒマもない。
そういうえば来週は同級生の結婚パーティーがある。少し多めに下ろ
しておこう。わたし、ちゃんと祝福できるかな。そんなことを考え
ながらも、帰り道には少し用心する。こんなときこそ「金を出せ」な
んで言われたらこわいよね。けど、ほんとに必要なんだつたら支援
もやぶさかではないかなあ、なんて。

「おねえさん」

たとえばせ、それが若くてかわいい男子だったりメシのひとつもあ

「おれもまだよ。

「おねえさんてば」

「…わたし？」

「ハルミを出て少し歩いたところで、そんな声に呼び止められた。

「ハル、おねえさん。悪いんだけど、金貸してくれない？」

街灯に浮かぶ顔は、だいぶ年下の男の子。わたしはなんであんな返事をしたんだろう。よっぽど疲れてたんだろうか。今週は毎日残業マックスだったし。

「いいよ、あげる。その代わり私の恋人になってくれない？」

いいや。理由はあとで考えよう。

中学時代の仲間と久しぶりに飲んだ。

起業したやつがひとり、大企業でバリバリ働いてるやつがふたり。いまだにアルバイト待遇の自分の飲み代は、3人がおごってくれた。うれしくは、ない。

あー金がほしい。

本当に求めるべきものはそこではなくて、仕事、だつたり目標、だつたりするのだろうけれど。いちばん手っ取り早くてわかりやすいのが金だったのだ。今の自分に自信をもたせてくれそうなものは。

金もないのに入ったコンビニで、金を下ろしていいる女性が目に入った。万札を数枚、いつも簡単に手にしている。

理由はわからない。なんとなく後をつけて行って。ああ、酒のせいかな。なんとなく、声をかけてしまった。

「おねえさん」

返事はない。あれ？ 年上じゃなかつたかな。気にするのはそんな

ところではないのだが、酔つた頭ではわからない。

「おねえさんてば」

「…わたし？」

ふり返った人は、自分より少しオトナの女性。ほら、やっぱりおねえさんでいいんじやんか。自分の当て推量が当たつたことに満足して、とんでもないことを口にしていた。

「せつ、おねえさん。悪いんだけビビ、金貸してくれない？」

「……」

女性に無表情で射すべめられ、頭が冷えた。

やつべ…これ、ケーサツ呼ばれたらアウトじやね？ 何やつてんだ俺。大声を出される前に、酔っ払いの戯れ言のフリをしてとつとつ逃げよう。

しかし、女性の意外な返事に、体の動きが止まつた。

「いいよ、あげる。その代わり私の恋人になつてくれない？」

「…なんて言った？ やっぱ醉つてんだな、俺。

「…いくら必要なの？」

「…何言つヒンの」

「ああ、この人も酔つ払いか。そう考えれば納得がいく。とたんに気がラクになり、今聞かれたことに答えを返す。

「…いぐらひそりやあ、あればあるだけいいしょ」

「なんだ。明確な用途があるわけじゃないのか」

つまりなさうにしつぶやかれ、今夜同級生に言われた言葉を思い出す。　お前には明確な将来ビジョンはないのかよ　ねえよ、やんなもん。劣等感と苛立ちがよみがえる。

「まあ、いいわ。じゃあ30万でビツ～　1カ月30万」

田の前で指を二本立てている女性は、まるでやおやで大根を值切つてこむかのような自然な笑顔で。ヘンなのに引っかかっちゃった。そう思つた。

「ホント何言つてんの？」

金持ちの醉狂かよ。しかし当の本人はまじめな顔で、

「少ない？ 私の月給より高いけど… こいつのしたことないから、相場とかわかんないんだよね」

相場なんてあるかつての。アタマおかしいんじゃねえの？ ああそれとも

「うへこり」と…

「わ、なに」

腕をつかみ、暗がりに連れ込む。公園のフェンスに体を押しつけ、頬に手を添える。至近距離で顔を覗き込み、せわやく。

「要するにうへこり」と、したいんだろう？」

「ちがう、違う… ちょっと待つで…」

必死に体を押し返してるので、あたたか離してやる。

「俺のカラダを貰こいたいってことじゃなーの?」

しかしそう問ひつい、真っ赤になつて否定された。

「違うー。やうこらんじゃなーって…いや、違わない、けど、でも違つてしま

そして俺は三度田のせつぶ。

「何言つてんの?」

「えーと、だからあ。そりやいすれはやつこいつのもナシではないけどさ。そんな、出会つたその田たシたりとか、普通はないでしきう?」

「いや、あるでしょ。」

「じゃあ30万も払つて1カ月も俺に向ひしてほしーの?」

「えー… うとお…」

別に知りたいわけではなかった。適当にあしらって帰るつもりだったんだけど。予想外の回答に、不意をつかれてしまったのだった。

「わたしを好きになつてほしい」

遊び慣れてそうな、イマドキの若い子。だと思つた。暗がりに連れ込まれたときには驚いたけれど、この反応にはもつと驚いた。

「わたしを好きになつてほしい」

自分でも、何言つてんだかと呆れるので、自然と上目遣いになる。愛されるより愛したい。けどやっぱり愛されたい。誰かね、わたしを好いてくれる人がほしいんだよ。そんなつもりで言つたら、目の前の彼が動きを止めた。薄暗くてよくわからないけれど、キャラ男のはずのこの人は。

「…照れてる?」

「…ねえよ」

この日のことは、あとからとても叱られた。無防備もいいところだと。けれどなんとなく、この人はいい人なんじゃないかなつて、思つてしまつたのだ。

「で? どうする?」

「…つまり、1ヶ月間恋愛ゴシコしてたら30万くれるってわけ?」

「そり、かな? 「今、今でいいつか... できれば本気がいいけど」

「オッケ、受けれるよその話。なんかアンタ面白そりだし」

... 本当に乗つてくるとは思わなかつた。どうしよう、釣れちゃつた。

「えつ。あ、そり、ですか。ハイ... よりしくお願ひします...」

「よりしくお願ひします」

打つて変わつて余裕の笑みで返される。攻守逆転。えーと、具体的に何すりやいいんだい。お金がかりむ」とだから、としあえず契約書でも交わしとく? あ、そうだ。

わたしは慌てて時計を確認する。

「それって明日からでいい? “今日” つてあと一時間ちょいしかないし」

そんなことを言つたら、大笑いされてしまつた。アンタの金銭感覚どうなつてんの? と。ま、たしかにそつだな。見ず知らずの男にポンと30万払うかと思うと、そんな些細な出費を気にするのだから。けどわたしの中ではどちらも違和感はない。

「あーじゃ、お金もつかい下ろしてくるよ」

「最初に払つつもり? 最後でいいよ。俺がもう一逃げるとか考
えないの?」

「…するの?」

そんなこと、考えもしなかつた。だつてほら、「しないけど…」と、
頬をかいてるじゃない。

じゃ、まあとりあえず、と、私たちはケータイの番号とアドレスを
交換しあつた。

「ふーん。カナさんっていうんだ」

「あなたも…カナタ?」

ケータイの画面には「奏太」の文字。しかし彼は笑つて「ソウタだ
よ」と言つた。

明日から一ヶ月間。ちょうど8月1日から31日までを、私たちは
恋人として過ごすことになった。

……てのはいいとして。で、何しよう? なんにも考えずに始めてしまったのだ。えーと、とりあえず、でえと? 明日つから? いや明日は家でダラダラしたいんだけどな。けど毎日なんかしないとお金がもつたいたいのか。ああノープランにも程がある。

「で、何しようか……?」

提案者のくせにソウタくんにフツてみる。

「ちよびこいや。カナさんも、今日泊めてくんない?」

……
つ

えーーーっ、いきなり!?

「俺いま住む所なくてさ、友だちんとこ転々としてんだけど。今日行こうと思つてたやつ この近くなんだけど、最近オンナできたんだよね。アホ無しだから、彼女連れ込んでたら困るなあつて思つてたんだ」

「はア……そりですか」

「なんなら1-2時回るまで外で待つてるけど。1-2時すぎたら泊めてくれてもおかしくないっしょ？ 彼氏なんだから」

「…今田はまだ、手は出さないでよ？」

念を押してみると、両手を挙げられた。

「なんでも言いつ」と聞きますよ？ お金もりうんだから。カナさん好みの彼氏になるよ」

まあ…いいか。帰るとこなべて困つてんなら。

「せしたら…部屋片づけるから、30分くらい待つてくれる？」

「別に“恋人”なんだから取り繕わなくていいじゃん」

「恋人だから、よく見せたいんじやん」

泊めてもらうから、1時間サービス。そつとつて彼はそつそく優しい笑顔になつた。

「部屋が片づいてなくつたつて、カナさんへの気持ちは変わんないよ？ むしろ、普段のカナさん的生活を知りたいな」

…「つわ…す」い破壊力。これは、なかなか費用対効果の高い恋愛ができるそうだ。

「部屋、散らかってても？」

「うん」

「新聞が散乱しても？」

「へえ、新聞取ってるんだ」

「洗濯物が干しつぱなしでも？」

「うん」

「洗い物、流しに置きつぱなしでも？」

「……うん」

「たまたま」「ミが…」

「も、いいから…」

困った顔で止められる。やつすぎたか。けれどその顔がなかなかかわいくて、思わず笑ってしまう。

「恋人でもそうでなくとも、とりあえず人様をお招きできるくらいの体裁は整えさせて」

そうお願いして、彼を置いてひと足先に家へ帰った。今週はずつと残業続きだったものだから、家の中はほんとにヤバイ状態だったのだ。

これから彼女の部屋に行つて、「やつぱりお願ひ」と縋られても別に構わない、と思っていた。というか、結局はそういう目的なんじやないかと、これまでの経験からそう思つていた。それでもいい。彼女の顔なら余裕で範囲内だ。そうしたら、「一夜のおつきあい」つてことで、いつものようにサッパリ別れればいい。金は別にいらない。今夜寝る場所が確保できただけでもラッキーと思おひ。

彼女からの連絡を待ちながらコンビニで立ち読みをしていたときは、まだそんなふうに考えていた。ただ 胸がやけにドキドキして、読んでるマンガの内容がちつとも頭に入つてこなかつたのは自分でもなぜだかよくわからない。それは、女がシャワーを浴びているのを待つ時間のような“カラダ”的ものではなくて。初めてのデートの待ち合わせを待つときのような、じつに純粹なトキメキを、俺は感じていたのだった。

「お待たせ」

「おじやましマス…へえ、超きれいじゃん」

妙に照れくさいのを抑えながら、もじもじとカナさんの部屋に上がる。1Kの部屋はこぞつぱりとしていて、全然散らかってなんかいなかつた。もし彼女がこの部屋のような人柄などしたら、俺けつこう好きかも……なんて考えながら、クローゼットにしきものに手をかける。

「案外」心中につめこんだだけだつたりして

「たつーちゅつー。」

よくわからない擬音を発して慌てて止めにくる。やつぱ面白こ、ひのう人。予想外に体が接近してしまい、ドキリとする。定石なりのあと女のほうから色皿を寄越してくるもんだけビ。

「あ、座つて。わっかどわわ」

皿を合わさず、テーブルの反対側を示されてしまった。けれどその皿の泳がつぶりに、こちらまで恥ずかしくなつてしまつ。

まいりながら座ると、彼女はぺろんと一枚の紙を取り出した。

「えーと……期限は8月31日……」

手元を覗き込むと、「契約書」と書いてあった。

支払額・￥300・000・

きつちりしてんなあ……。

「ね、俺もし本氣になつちやつたら、延長つてあり?」

甘えた感じで問うと、ナシ、と即答された。きつちりしてんなホント。完全に遊びかよ そう思つたのだけれど、その理由はもう少し違つたもので。

「だつてか、好きになつちやつたら多分、金の続く限り際限なく続けちゃうと思うんだよね。それで最終的に金も男も残つてない、みたいな」とになつたらもう立ち直れないもん

「……」

「じこまで本氣なんだら?。意外な言葉に返事をできずこいつと、彼女はこんな提案をした。

「ね、満足度によつて5万円の増減ありつてのじ?。わたしが内容に満足しなかつたらマイナス5万」

「満足をせられたら35万円? いいね、燃える」

そつ答えると、「査定あり。増減5万」と楽しそうに書かれてる。そ
うか。楽しめばいいのか。この人のペースに巻き込まれるのは悪く
なさそうだ。

「カナさん？」

「ん？」

「手を出すとか出さないとかの話」

ピタリと彼女の動きが止まる。

「俺、カナさんが望んでくれるまで我慢するつもりだけじゃ。口で
は嫌がってるのにほんとは欲しがってるみたいなの、読み取れない
から。そのときはちゃんと教えてくれる？」

「う、うん……何がしかのサインは出すよつにやるよ」

「楽しみにしてる」

あ ヤバイ。その照れたようなハニカミかた、ツボかも。ちょっと
ともう一回確かめさせてくんねつかな。時計をちらりと見る。よし、
12時回った。今からこの子は俺の彼女。いろいろ囁いて、今のそ
のはにかんだ顔をもつと見せてもらひや。

ちりつと時計を見た。ああ、12時回ったのか。ソウタくんの態度がなんだかグッときくなっている。切り替えの早い子だな。普段の生活を聞くと、彼のバイトは基本的に17時から22時。休みは不定。たまに夜シフトになるときもあるらしい。

「じゃあ会えるのは土日の毎晩だね。平日はわたしも帰り遅いし」

「週末しかカナさんに会えないの？ 1ヶ月しかないのに。ここに住むのダメ？」

「…金曜の夜に来てよ」

ソウタくんは「ちえ」と言っていたけれど。そこは、ね。一人の暮らしも守りたいというか…彼の存在は非常にしておきたいんだよね。あとで“ひとり”に戻ったときにすぐ順応できるよつ。

「明日は？ バイト？」

「うん？」

「うん。今日が休みだから、しばらく連勤…あのを」

「明日、バイト終わったらや、」ここに帰つてきてもこい？」

「……」

「今日会つたばっかなのにおかしいけど。俺、できるだけカナさんと一緒にいたい」

ソウタくんのその言葉は、素直にうれしかった。さすが30万円の威力は大きいね。正面から気持ちをぶつけられて、はにかんでしまう。あの人はこういうこと、言ってくれなかつた。あの人は

「カナさん？」

ハツと我に返る。

「うん。明日も来て。わたしもうれしい」

今度はムリヤリ作った笑みだつたけれど、ソウタくんは喜んでくれた。

そして、彼には悪いけれど床で寝てもうつ。スペースがないので、わたしの寝るベッドのすぐ下だ。

「ゆか固いでしょう？ なんか申し訳ないな」

「こつかはそつちに上げてくれんでしょう？」

「ああそれはどうでしょ！」

「ヤリとしてやつたら、ほんと想定外！と笑われた。そこ、はにかむトコじやないの？」

悪いけど。キミみたいな若造に読まれるほどわかりやすい性格だつたら、もう少し人生は泳ぎやすかつたはず。

「あー面白え。俺本気でカナさん好きになりそつ」

「ソウタくん、バイト接客業でしょ！」

「なんで？」

「すうじいサービス精神」

マジで言つてんのになー、なんていうつぶやきは聞き流す。それぞれの床につき、電気を消した。この部屋で誰かの息づかいを聞くのは久しぶりだ。あの人気が、来なくなつてからだ　ダメだ。思考があの人から逃れられない。

「カナさん、まだ起きてる？」

「……うん」

「俺わかんないんだけどさ」

「なに？」

「カナさんぐらうの人なら普通に彼氏できるつしょ。なんで金なんか払つてんの？」

「……いつフラれるかわかんないのって、もう怖いんだよね。期限決めてればさ、あらかじめわかつてからあんまり傷つかないで済むし。別れるのもお金のせいだから、自分が嫌われたせいじゃなって、あんまり傷つかないで済むでしょ？」

本音を吐いてしまった。裏返せばそれは、想像もしていなかつた突然の別れに、傷ついたことがあるつてこと。たぶん、ソウタくんもそれに気づいただろう。

「……どんだけ不幸な恋愛してきたの？」

ほつといてくれ。

けれど勢いに乗つて、さらにバラしてしまつた。まだ浅い関係だから、却つて話しやすかつたのかもしれない。

「わたしは、自信がないの。いつも、嫌われるのが怖くてびくびくしてた。だからワガママとか上手に言えなかつた。それが、お前の気持ちには壁があるつて言われて」

「……」

「いけない。これじゃ完全に体験談だ。でも止まらない。

「だから余計に怖くなつて。もう距離の取り方がわからないから、彼氏とか、きっと作れない。でも、誰かにわたしを求めてほしい。必要としてほしいの。これは契約だから、さ。1ヶ月間は絶対に嫌われないでしょ? だから怖くないし。ワガママも、あつとうまくなれる」

「ああ……言つた。普通は引くわな、これ。

「……もつかに同じこと聞こえていい?」

「やだ」

「どんだけ不幸な恋愛してきたの」

だからやだつて言つたじやん!」

「……でも、相手が俺でよかったよ」

「なんで？」

あのねえ、ヒ、少し怒ったような顔。

「俺じやなかつたら、今うるさいへこヤラれてたよ。 そんで金取ら
れて終わり」

「やつか… そりだよね」

「それだけで済んだらラッキー。画像でも録られてやすられてたか
もしれないし、ひどけりやʌʌの撮影されたりとかもあるんだよ？」

そ、そんな世界があるのか。

「たしかに軽率だったね… 反省します」

「もう、これからは俺が、撃退してやるから。 そういう悪こ輩とか、
カナさんの血信の詫びとか。 ……昔のカレの、思い出とか」

……
。。

「……で泣いたら、面倒へさい女だと強われる。 とつてひがえでし

まったくのは、わたしの悪いクセだ。自分で言つたんじやん、期限内は絶対嫌われないって。お金払うんだもん、大丈夫だよ。思ったこと、言おひつ。

「……うれしい」

返事はなかつた。少し、間が空いてしまつていたし。もう眠つてしまつたのかもしれない。けれどきっと、聞いてくれたんじやないかと思う。さつき会つたばかりなのに、わたしは彼をきっとそういう人だと思った。

その言葉が嘘でも本当でも、つづん。1ヶ月の間は、ぜんぶ“本当”だ。彼の言葉は、わたしのまだ乾かない傷を、優しくなでてくれた。

こんなに走ったのは久しぶりだ。バイトが終わるや、俺は駅へ猛ダッシュショしていた。少しでも早く、彼女に会いたかった。先週の土曜日の〇時ちょうどに俺の恋人になつたばかりの彼女に、一週間ぶりに会いに行く。

あの日の翌朝は、俺の存在をすっかり忘れた彼女に腕を踏まれて目が覚めた。

「「「めん! そういえばいたんだつた」

「…ひどくね?」

「ごめん」「ごめん」と腕をさすつてくれる彼女に、「昨日の話、なかつたことにされちゃう?」と聞いたら、「したくない」と即答してくれた。

わたし、慣れたら早いの。そんなことを言つて、もづつと前からあの部屋に俺がいたかのように自然に 要するに俺の存在をまったく気にかけず、力ナさんはさつと掃除やら洗濯やらを始めた。こっちのほうが居心地が悪い。

「なー、俺もなんか手伝えることない?」

女の家で家事の手伝いを申し出るのなんて、初めてだ。見抜かれていたのかもしれない。カナさんは驚いた様子だった。

「じゃあ…お皿、洗つてもうおつかな」

「了解」

一人分の朝食だから、大した量はない。それでもカナさんは、俺の手元を覗き込んで感心してくれた。

「手際いいねえ」

「バイト、カフェバーでさ。基本的にホールなんだけど、たまにキッキンも手伝うから」

「へえ。長いの?」

「学生んときからだから、もう5年くらいかな」

「ふーん…」

あ。就職せずにここまでバイトなんだって思われたかな。けれどカ

ナさんは「頼もしいね」と、背中をポンと叩いてくれた。よかつた。点数稼げたか。

……って。何の？

ああ、ほら、5万円アップをせるための点数だろ。そつだそつだ。金もらうんだしね、やるからこはしつかり満足させないとさ。そんなふうに、自分の立ち位置を小まめに確認し直さなければ、うつかり境界線を見失ってしまいそうだった。

そしてその境界線を放棄したのは、その日の夜だ。つまり、彼女と過ごすふた晩め。力ナさんはバイト先から向かった俺を、「おかえり」と迎えてくれた。

「ソウタくんが、お金の使い道って決まった？」

「…なんかあつたほうがいいの？」

寝る支度をしながら、そんなことを聞かれた。説教でもされるのかと一瞬身構えたが、ほんとに彼女の答えはいつも想定の範囲外で。

「男に金を貢ぐと、男をダメにするつてイッキーさんが言つてたからさあ。“遊ぶ金欲しさ”とかだったらソウタくんのためによくなかったかなつて思つて」

電気消すね、と呟つて、もう口継がる。

「でも、何か使い道とか必要のあるお金だったり、投資つていうか
や。支援してるみたいな気分になれて、まあ要するに自己満足?」

そんなふうに、自分のやるやれをたいつて叫べる強さを、マネしてみ
たくなる。

「病気の妹の治療費」

「……」

「へ、このだつたら満足をかいれるへ。

わざとそんな言ご方をしてみせた。

「医療費だったら、円の支払い額の上限があるでしょ?」

ほりまた、予想外の答えを返すから。明かすつもつのがつたこと
をじやべりたれる。

「…高額療養費制度のこと？ 上限超えたら補助はされるけどさ、8万は払わなきゃいけないから、それが毎月続けばやつぱりキツイよ」

「そつか…」

「……」

「ていうか、ホントだつたんだ」

「力ナさん」そ詳しいじやん」

「仕事、医療関係」

「そりだつたんだ…こんな話、他人にしたの初めてだ」

この、お互いの顔が見えない位置関係。暗闇の中、横並びで天井を見つめているこの空間が、するすると言葉を引き出す。

「そしたら、わたしに割く時間なくない？　付き添いとかあるなら無理しないで」

「いいんだ。もう、必要ないから」

だから普通なら絶対に言わないようなことを、話してしまつ。そりいえば力ナさんも昨日、失恋の話を突然始めていたな。何を俺たちはべらべらと。

「…必要なじつて…？」

「治療の甲斐あって、無事退院。それを機に母親が再婚してね、再婚相手の家に一緒に帰つていたよ」

「やつ。よかつた…ソウタタケルは？」

「25歳で新しい父親と同居つてのもね。距離があるほうがつまくやれるよ」

「それで、友だちんちを転々としてるの？」

「家、探さなきやつて思つたんだけじゃ」

「うん」

「仕事も、探さなきやつて思つたんだけじゃ」

「うん…」

「…ひから先は、言えぱきつヒダメなヤツだと思われてしまつヒビがわからせつていた。けれど止まらなかつた。

「…ひから先は、母さんが看護師でさ。仕事休めないから、俺が妹の面倒みるつつつて。妹10口下なんだけど、日中一人で置ことくのは心配でさ。だから時間に自由のきくバイトの身分でこよなつつて」

ああ……最低だ、俺。

「……そつこつ理由つけで、就職から逃げたんだ」

「……」

「そしたら大義名分が退院しちゃったから、困つてんの。家探し
たり仕事見つけたりしなきゃなんなくなつてさ」

「うん……」

「なのに、全然からだが動かなくなつてさ」

「うん」

「俺いまどこに向かつてんのかさ、そもそもどこにこるのかさ、ふ
わふわして、わかんなくて」

やべえ……俺何言つてんだろ？。そしてなぜ声が揺れてんだろ？。

「燃えぬき、だね」

「……なーっ？」

ちょっと違つかもだけど、と言つて彼女はこんなとえ話を始めた。

部活の大会前つて毎日練習があつて忙しかつたのに、テスト勉強ちゃんとして、点数も取れていたけど。大会終わつて引退したとたん、気が抜けちゃつて、時間はたくさんあつたのに、テスト散々だつたんだよね。

「んー…だからつまり、ソウタくんを支えてた紐がぶつつり切れちやつて、自分で立つための重心を取り戻すのに時間がかかるつてるんだね」

「支えつて…あいつ支えてたの俺のまひだつての…」

「“妹を支えなきゃ”つていう思ひで支えられてた、でしょ？」

「……」

「休んでいいと思つよ。ほんとにヤバイと思つたら嫌でも浮上するもん」

「そりかな…」

「やうだよ」

いつまでも就職をしない俺を、事情を知らない友だちは「ラクでいいよな」と揶揄する。事情を知つてゐる母親は、「いつまで甘えてるの」と叱咤する。元気になつた妹は、「あたしのせいみたいでやなんだけど…」と生意気なことを言つ。そしてカナさんは、そのどれとも違う反応を俺にくれた。

「……こつぱい、がんばったんだね」

「……」

「わっしょいわっしょい、ソウタくんはがんばってましたんだね」

……ああ、もつ、境界線なんかいらない。金のためとか本気とか、どっちでもいい。彼女を笑顔にできるなら、それでいい。

「カナちゃん」

「ん?」

「好きだよ」

「……ありがと」

今からは、俺が“いつ”と“せんぶ”“本気”だつて言つたら、引く?

「ソウタくん、サービスいいね」

それはあなたには伝わらない“本気”だけれど。

ドアを開けたら、汗だくのソウタくんが息を切らせていた。

「いらっしゃい。どうしたのその汗」

「早くカナさんに会いたくて、超走ってきた」

まあこの子つたら…。破壊力が一週間でパワーアップしている。

「つーか、カナさんひどい」

「？ 何かした？」

「先週は“おかえり”だったのに、今日は“いらっしゃい”？」

そうだったつけ？ 首をひねりながら部屋へ戻ると、「つれねー」と言しながら彼がついてくる。Tシャツの胸元をバサバサ扇ぎながら。

「シャワー浴びる？」

「えつ…。」

バサバサの音が止まった。ふり返ると、真っ赤な顔に半笑いを浮かべている。田がマジだ。

「違う！ そうじゃない！」

即座に牽制を加えながら、バスタオルを渡してやる。それと…ちょっと、引かれるかもだけど、これ。

「サイズ合わなかつたら」「めん。部屋着あるといいかなと思つて」
そう。ついつかり、彼用のTシャツと短パンを買つてしまつたのだ。

「これ、俺用？」

「ひ、引いた？」

「俺のために用意してくれたんだよね？ 元カレのお古とかじゃなくて」

いやsusがにそれは！ つーか、

「引かれるのが怖くて前は「んな」とできなかつたよ

「へー俺だけ、かあ…やべ。シャワーヨツヨツボディ照れる」

やベーやベーと言しながら、ソウタくんは風呂場に入つて行く。若い子の「やベー」はいい意味なんだか悪い意味なんだかよくわからぬ。ナゾ。

そつか。ああこいつ」としても嫌がられはしないのか。ひとつ覚えた。

一週間会わなかつた間、ソウタくんは毎日メールをくれた。私は、朝の通勤電車と、帰りの電車、そして夜寝る前に返信をする。日に日に甘さを増していく彼からの文面に、ニヤけながら、はにかみながり。

いい買い物したな。

まだそんなふうに彼を見ていた。

汗を流したソウタくんは、かわりに色氣をまとつて戻つてきた。ガシガシと髪を拭くその姿、いいねえ。田の保養だ。

「なに?」

「見とれた。かつこよへて」

「…マジヤバいからやめて」

その“ヤバい”はどうちだり。まあこいや。

「カナさん、明日はずっと一緒にいられる?」

「あー…眞までだなあ。夕方から友だちの結婚パーティーがあつて
そ、美容院予約してるから」

そつか。とあんまりやみしそうにつぶやくものだから。思わず手を
伸ばしてしまつた。会いたいと言われて断るなんて、いつものわた
しなら考えられない。そんなの怖くてできない。彼の腕に手をかけ
て、言い足した。

「あの、けど、夜はまた泊まつに来てくれる?」

「……カナさんそれサイン?」

「何の?」

「これべらこならしてもいい?」

……あつ。

抵抗はしなかった。わたしも期待していたのかもしれない。彼に、ふんわりと抱きしめられる。

これは、ヤバい、ね。

でもいつか。そのままおでこを預けると、背中に回った腕がギュッとしまった。ビッシュ。ビッシュ。わたしは彼のTシャツの胸元をくしゃりと掴む。

「… それも、サイン?」

えーっと…違うよ。な、違わないよ。けど、

「まだ、もうちょっと待って

「うさ。待ってる

「でも

「ん?」

「おひ少し、おひしててくれる?」

喜んで。そんな優しい声が聞こえて、わたしはそっと目を閉じた。
なんの」とは。ただ、人肌が恋しかつただけだ。

だけだ、と思う。けど。

相手を憎からず思つてはいるのでなければ、説明できなかつた。この
ドキドキと、不思議なほどの安心感は。

破壊力は抜群だった。

シャワー浴びてきて

あなたの着替え、買っちゃったの。だって、これからずっと、会いに来てくれるんでしょう？

明日の夜も一緒にいたいの

いつやつてギュッとしてて、お願ひ。

彼女の言葉が脳内で変換され、さらに威力を増す。腕の中に抱きしめた細い体。その先に進みたくなるのを全力でがまんする。

会えない間のメールのやりとりで、「好きだ」「会いたい」と何度もささやいたのが効いたのか。彼女も「契約」を越えた気持ちを持ち始めてくれたんじゃないかと、勝手な期待をしてしまう。

俺の勇み足は、カナさんのストッパーを外したらしい。カナさんのほつからくつづいてくるようになった。それまでテーブルを挟んで向かいに座っていたのが、ピタリと横にくっつく。ちょ、体育座りとかヤメテください。威力ありすぎ。

「ほんとはね、何にもしないでただくつこしてただけ、つていうのがしてみたかったの」

その過去形は、俺との経験談ではなく。

「前の彼とは、できなかつたんだ？」

「…あの人は、うちに来るときはそういう目的だったから。近寄れば即始まつちやつたし」

「何が」の部分を言えない力ナさんの恥じらいをかわいいと思う一方で、そんな力ナさんを抱くためだけに部屋を訪れたという元カレに、違和感を覚える。

「わたしからくつづきに行くとかできなかつたなー…拒否されるのがイヤで、いつも向こうが求めてくれるのを待つてた」

それって、力ナさんの自信の無さつていうか…そんなふうに思われる彼氏のほうにも問題ねえ？ 遠慮しすぎだろ。いったいどんな不幸な恋愛してたんだか。

「あ、」めぐ。こんな話

「その人は知らなかつたんだな」

「…何を?」

「ほんとに好きだつたら、エッチ無しでもいいからついてくついてるだけで幸せつてこと」

言外に含んだふたつの意味。

「俺も今日知つたけど」

「……」

きつとカナさんも気づいたから、返事が無くなる。

元カレはカナさんのこと、“ほんとに好き”じゃなかつた。
俺はカナさんを“ほんとに好き”。

今、彼女をうつむかせているのは、どちらの意味を気にかけてのことなのか。少しでも後者が含まれていたらしいのに。

「ね、カナさんさ、夏休みいつ?」

空気を切り替えるように、話題を変えた。

「夏休み？ ああ… そういえばまだ申請してなかつたな」

「8月中に取れる？」

「んー… お盆に会わせるのがいちばん休みやすいかなあ… 暑いし混んでるし、ほんとはそこ避けたいけど」

「予定まだ決まってなかつたら、俺も休み会わせるから。どうか旅行しねえ？」

そつ言つと、カナさんさまんまるな田をせりひまんまるに見開いた。

「それって… オプション？」

「またそんなことを…」

「契約内。追加料金なんて取らないから安心してよ」

「旅行があ… ソウタくん、運転できる？」

「免許持つてるよ」

カナさんの顔がパーティーと輝く。

「ドライブしたい！……って、お盆にドライブとか、死に行くようなもんか」

「俺、カナさんとだつたら渋滞大歓迎」

「どうして？」

「だつて渋滞中つて、狭い密室にカナさんと2人つきりでしょ」

出た。カナさんのハニカミいただき。じゃあ行きたいとこ考えるね、
と言つて、うれしそうに笑う。と、それがいたずらっ子みたいな
“ニヤリ”に変わつた。

「カップルが一線を越える定番つて、“旅行”だよね」

「へえ、そなんだ。俺、一線越えてからカップルになるしかしたことないから」

ギロリとこちらむカナさんもかわいい。

「妬いた？」

「妬いてないよ。引いただけ」

「カナさんだけだなー。カラダ田的じゃなく一緒にいたいのって」

「せうだね、お金田的だもんね」

カナさんの声がだんだん固くなる。内心しつつたと焦りながら、賭けに出てみた。

「やつぱ妬いてんだ」

「……」

「ビンゴ。低い声で、「うん」と聞こえた。ヤバい。ヤバいよカナさん!」

「じゃあ、その旅行で、一線越えたりやつ?」

けれどやつぱつた俺に、カナさんは一ヤリと笑つて「まあそれはどうぞよ」 と楽しげに応えた。

本当はカラダなんでもいいんだ。いや、うん。そりゃあ本身ともにうとカナさんに近づきたいのが本音だけど。カナさんが望むまでは待つつもりだ。人の体温が恋しくせに臆病になつてい

るカナさんを、俺が安心させてあげたい。

……にしても。カナさんをそんなふうにした元カレってヤロー、いつたい何をしたんだか。よっぽどヒドイことしたんじゃねえの？ 目の前に現れたらぶつぶしてやりてえ。

その機会がすぐそこで待つてることを知るはずもなく。俺の思考を遮ったのは、本日いちばんの破壊力を持ったこんな誘い。

「…今日は、いつまで寝ない？」

「え……？」

「やつぱつ、ゆかで寝かせるのって悪いし…」

「カナさんのベッドで、一緒にないこと？」

彼女は不安げな表情で目を泳がせている。嫌がられたらどうしようか、なんて考えているのだろうけど。とんでもない！ 俺はブンブンと勢いよく頷いた。

電気を消して、ベッドに上がる。カナさんの寝間着はTシャツに短パン。白い太ももを見たいけど見れない。いろんな意味で。

「『めんね、ソウタくん。わたしワガママ言つて』

「…こつワガママ言つた？」

むじひもつとワガママになつてほじことせんとせんとこのひ。

「だつて…一緒に寝たいとか、でもその先は待つてとか…男の人にはつらいでしょう？」

それは、まあ、今夜は眠れない自信はあります。

「いいよ、こうしてそばにいられれば。それに俺、カナさんが主張してくれるの、すばえうれしい」

そう。元カレには言えなかつたワガママを、俺には言つてくれる。だって30万も払うんだもん。カナさんはそうひづだうか。

「もう一個、ワガママ言つていい？」

「臺んで」

「…くつこて寝ていい？」

もぐもぐと身じろぎ、俺の体側にぴつたりとくつつく。ああ、だから太ももが。

暑いね、と笑いながら、カナさんが俺の胸におでこを乗せる。いやもうマジハンパないっす。

「カナさん、俺…カラダが変なことになつたら」「めん

すでに自覚はありますが。

「そしたら、わたしが責任を持つて、イタつ

俺のデコポンをまともにくらい、カナさんがおでこを押さえる。責任持つて、どうあるつて？ 手をわきわきさせんんじゃない！

「スミマセン、調子にのつました」

「気をつけなきことよ？ ほんとシャレになんないから」

しばらくすると、カナさんは寝息を立て始めた。へえ…俺の胸で寝られるんだなあ。悶々と眠れずについた俺も、その波が去ると、腕の中に彼女がいること、彼女が自分を信じていることにしみじみと満

ち足りた気持ちになり、自分でも意外なほど、心が落ち着いて、
彼女を追いかけるように、眠りに落ちたのだった。

「カナ！ 久しぶり」

「いやーんコウコ！ 幹事おつかれ。ね、今日つて結構来るの？」

大学時代のサークルの友人ミキと、田中先輩との結婚を祝うため、サークルの仲間たちで開いたパーティーだ。そんなもん、お祝いを名目にした大同窓会である。

「すい」とよ。上下3代ほほ勢揃い

「す、」…やつぱあの2人の結婚はみんな待つてたからねー。春長す
ぎるつつの

「いやあ、みんなそれを肴に飲みたいだけでしょ。久しぶりに集まる口実を提供してくれたことには感謝だけど」

あはは、と笑い合う。いいね、学生時代のこの感じ。

「ね、乾杯の前にウェルカムドリンク用意してあるから。飲んでなよ」

受付を確認する幹事のコウ「に手を振つて、店の中へ入る。あやー！ 久しづりー！ ちょっとアソタおじさん化しそうじゃなー」？

などなど挨拶を交わしながら、カウンターにたどり着いた。

「お飲み物何になさいますか？」

「んー…ノンアル」「ールは

「どれですか。と喧嘩うつとして、店員さんの顔を見上げるや。ぽかん、としてしまった。

「ソ、」

ソウタくん！！ ソウタくんがグラスを持つて立っている。パクパクするわたしに対してもソウタくんは、一瞬驚いたような顔を見せたものの、すぐに目線だけで周囲を確認し、わたしへは何も言わずただニーッコリとだけしてくれた。

「あー…ドリンクの前に化粧室、使いたいんですけど」
「「」案内します」

トイレへ向かう通路、人がいないことを確認してから、ソウタくんと呼んだ。

「バイト先、ここだつたんだ。すいいびつくりした」

「俺も。超偶然。：大学時代のお仲間たち、だつけ？ 幹事さんが、今日は結婚パーティーのふりした同窓会です、なんて言つてたけど」

「あはは、そつそつ。これだけ集まれるなんてめつたにないし」

「そつか。楽しんでね。おもてなしはまかせてよ」

店へ戻つて行く彼を見送つてトイレに入らうとする、ああそうだと呼び止められた。

「カナさん、今日マジきれい。惚れ直す」

「いやなに。ソウタくんのギャルソンコスプレのほうがあつとソソりますよ」

ニヤリとしてやつたら、コスプレじゃねーし、と笑いながら戻つて行つた。でもね、ほんと。白いシャツの腕をまくつて、腰から下には黒く長いエプロン。マジかっけえつす！

よかつた。少し、力がわいたよ。じつは今日、わたしはとても緊張していたのだ。仲間たちに会えるのはすぐ楽しみだつたんだけど、そこに一点黒いシミがあつて。

みんな集まる。ほほ勢揃い。てことは、そう、きっと

「原田？」

あの人も、来る。

「原田、久しぶり」

笑みを張り付けてから、ゆっくりと振り返つた。

「村上くん…」

「元気だつた？」

あなたのおかげでボロボロでした。

「うん、まあ」

「よかつた、会話してもらえて。俺、原田と『まことに』なるのヤだつたからや」

どの口が言つわけ？ ほんつと、ムダな時間を過ぐしたわ。10年以上もあなたを好きだつたこと、人生最大の汚点。

「また、セ。メシとか行こ」うよ

「…うん」

情けないことに。用意してきた言葉はひとつも喉から出でこない。もう、普通に笑えると思つてた。あなたのことなんて、何とも思つてませんよって顔で。それか、もしかしたら、無表情で無視するぐらいできてしまうかもしないと思つてた。のに。…ダメだ。顔を見たら、もう。

あんまり長い間好きでいすぎたから、そういう体になつてしまつたんだ。村上くんを見ると体温が上まる体に。心拍数が上まる体に。わたし、まだ、この人が好きなんだ。

「俺たち、前みたいな友だち同士に戻れるよな？」

なんで、喜んでんの？わたし。

「うん……」

「…今田は」のあと、田口とかと約束してんの？」

「ユウコ？ まだ、決めてないけど、たぶんお茶でも飲んで帰るんじゃないかな」

「予定、ないなうか。」のあと2人で飲み直さない？」

「えつ……」

いけない。流れられちゃいけない。けど、もしかして。もう一度

「カナちゃん」

突然、耳元で声がして、肩をすくめる。

「ソウタくん……」

パーティー用のドレスとマイクで超絶キレイなカナさんと別れ、仕事に戻る。スッピンにメガネもかわいいけど、あんなふうにもなれるんだ。知らずににやける俺の耳に、飛び込んできたセリフ。

「ねえ、カナに会つた？」

視線を上げると、女性が2人で周囲をばかるように話していた。1人は幹事の女性だ。グラスを下げるふりをして、聞き耳を立ててしまう。

「会つた。…どう思つ? ふつ切れたと思つ?」

「まだ引きずつてんじゃないかなあ」

「だよね… 今日あいつ来るんでしょ?」

「新郎と仲良いからね。ほんと、カナと会わせたくない」

まさか、元カレ?

「会つたらまた、やつぱり好きとか言いそうだよね、カナ」

「あの男もさあ、俺たち友だちだから、とか言ってフツーに話しかけるんだよね。ほんとムカつく」

やつぱり。どの男だかわ。カナさんをあんなに臆病にさせたのは。

「カナもいい加減、やめりやいいのに」

「あーもう、誰かさ、嘘でもいいからカナの彼氏のフリさせよつよ。あいつがもうカナにちょっとかい出せないようにな」

「ええ？ だつて今日いるの全員知り合いだよ？ それに、カナとあいつのこきをつだつてバラせないじやん」

なんだかわからないけど。元カレを阻止しようつとこつことなら大賛成だ。俺は迷わず声をかけた。

「よろしければ、私がしましちゃうか？ その役」

＝＝＝＝＝

意氣揚々と店を横切り、カナさんの元へ行く。女友達の公認ほど心強いものはない。教えられた相手の男は、ちょうどカナさんに声をかけているところだった。後ろから近づいたので、カナさんの表情はわからない。

「カナさん」

振り向いたカナさんは、驚いた顔。ソウタくん、とつぶやくと、元カレの顔色をうかがいつぱに田を泳がせはじめた。

「さつさと忘れた」とがあつたからだ。…失礼します」

元カレに会釈をし、カナさんの耳元に口を寄せた。もううん、相手の男にも聞こえるよ。

「」のあと、次会とか行くなら、連絡ちょうどいい。俺、先に家に帰つてゐから

「えつ、あつ」

カナさんが困つてゐる。

「ああ、原田、彼氏できたんだ」

「えつ」

「ちょっと、残念かな。なんてね」

「あ…」

あつせりと友人の輪に戻つていく男性を、何も言えずに見送るカナさん。

「どうして…」

「どうして？」

俺のほうが聞きたいよ。どうして、「どうして」なんて聞くの？どうして、そんなに切なそうな顔をするの？

「カナ、//キと[印]真撮り」

打ち合わせ通り、カナさんの女友達がカナさんを連れて行く。カナさんはきこひかない笑みでそれに応え、俺には何も言わずに背中を向けた。

幹事の女性、ユウ「さんとのじかへ戻ると、「グッジョブ！」と出迎えられた。

「あれでよかつたんでしょうか…」

「いいの。カナには荒療治だけど、それでもしなきゃ、あの子また

「あらかるふわざるか」

カナさんは、そんなにも未練を？ あの男に？

「あのー…元カレさんと同じもやつがあったのか、聞いてもいいですか？」

「元カレじゃないですよ。あんなのつまあつたうちに入らないもの」

えつ…！ だつて。だつてカナさんは。

「えいこい」とです？」

ユウコさんは、会話が人の耳に入らない場所に移り、こんな話をしてくれた。

カナはね、大学生のときから村上が好きだったの。もうずっと片思い。あいつは色んな彼女とくつついたり離れたりしてたから、諦めるのも告白するのもタイミングを逃しちやつたんだろうね。

けど何年か前から、うちらの同級生の子…アヤつていうんだけど、村上はアヤとつきあつよつになつて。けつこう長く続いてたもんだから、あれはもう結婚するだろうねつて仲間内で話してたの。カナ

もさすがに「諦めなきやね」って言つた。

それが、今年の春ぐらいいかな。村上とアヤがどうやらケンカして距離を置いたらしきのね。ここから先は口止めをれてるから、わたくしとさつきの子しか知らないんだけど。で、そのときに村上がカナを誘つてさ、そのまま寝ちゃつたんだよね。カナにしてみたら、ずっと好きだつた相手なわけだから拒んだりなんてできないでしょ？ それで、村上も味をしめてしばらくカナの家に通つてたみたい。

カナは、さ。そういうふうに体の関係を持つのつて、好きじゃなきやできないつて考えるタイプだから、村上に想いが通じたんだと思つちやつたんだよね。村上は別に、カナのことが好きだともつきあおつとも言つてないし、そもそもアヤと別れたとも言つてないのにね。

カナは、アヤに申し訳ないつて最初は悩んだみたいだけど、自分もずっと好きだつたわけだから、やつぱりうれしいつて。それを認めることにするよつて、言つてたんだけどね。何のことはない、村上はアヤとヨリを戻して、カナには「やつぱり友だちに戻ろう」のひとことで終わり。

「…なんスか、それ」

「ひどい話でしょ。端から見れば、彼女とのケンカ中にちょっと手出しただけつてわかるんだけど、カナは本気にしちやつたからや。別れた理由もわからないし、よつぱり血分に非があつたんじゃないかつて落ち込んでさ」

「そんなの、カナさんひとつも悪くないじゃないですか！」

「ありがと。けど、アヤとはどうなってるの…どうこうもりでわたしのところに来るのって、聞けなかつたカナも、やつぱりよくなかつたよね…」

「そんな…」

「カナつたらさ、うかれでペラペラしゃべつちやつたけど、アヤに知られたくないから村上くんとのことは内緒にして、なんて言つた。だから一人が寝たことは、わたしとしきの子しか知らないんだ」

お兄さんも知らない」とにしてね、と笑つコウコさんに、俺は笑みを返すことができない。なんだよ、それ。彼氏にふられて傷ついてんならわかる。なんだよ、遊び相手にされたのに気づかないで、相手の気まぐれを自分の非だと思ってるつて。そんな理由で怖がつてんのかよ。

「村上もね…友だちだつて言つなら、カナがそういうタイプの女じゃないつてわかつてもいいのにね」

「そうだよ。そんなの俺だつてわかるつつの。」

「カナも、早く村上を忘れるへりい誰かを好きになつてくれるとこいんだけどね」

「俺、立候補しますよ?」

もちろん冗談めかして、けれど本氣で言ひ。しかしコウノさんは、笑顔で首を振つて。

「ありがとう。お兄さんみたいな人にカナを大事にしてあげてほしいんだけどね。お兄さんにはダメだと思つ」

「…どうしてですか？」

コウノさんの答えは、バツサリと俺を切つた。

だつてお兄さん、村上と感じが似てるんだもの。

自分でも意外なほどに打ちのめされた。そのあとの仕事でも、カナさんの家に向かう道でも、コウノさんの言葉が頭の中ぐるぐる回る。

似て、ますか、俺。

薄暗いところで見てるからかな。顔立ちが、学生の頃の村上に少しね。だからカナも、初対面のお兄さんに声かけられても警戒しなかつたでしょう？

それは、俺たちが、もともと知り合いだつたからで……あ。

初めて俺が声をかけた夜、警戒もせずに「恋人になつて」なんて言つてきたカナさん。あれは、俺が、村上つて男に似てたから……？

カナさん、カナさん。俺、あいつのかわりだつたの？

ドアを開けてくれたカナさんは、少し赤い目をしていて。泣いたあとだつてことに気づいた俺は、カツとして その夜のモヤモヤを彼女にぶつけてしまつた。

俺が怒る筋合いなんて、少しありのに。

ほんとうに心底イヤんなつた。

あんな、人をバカにした態度をとるあの男に、それでも誘われて喜んでしまう自分が。せっかくソウタくんが助けてくれたのに、ジャマしないでとか思つてしまつた自分が。

どうして抜け出せないんだろ。いや、わかつてんだ、ほんとは。体が反応してしまるのは、単なる習慣。心が拒否するのは、認めたくないからつてだけ。20代をまるまるかけた片思いの相手を、あんなに好きだつたあのを、こんなにも簡単に好きじゃなくなれるつてことを。

これから誰かに恋をしても、きっとまた変わつてしまつんだ、つて、自分の心が信じられなくなるのが怖いから、村上くんのことをまだ好きだと思い込もうとしてるんだ。

ばかみたい。そこにじがみつゝ意味なんてないのに。けどやつぱり、あの人に手を差し伸べられたらきっと拒めない。

ソウタくん。ソウタくんはびつ思つただらう。コウノが彼に頼んであんなこと言わせたつて言つてたけど。どこまで聞いただらう。どう思つただらう。わたしのこと、びつ思つただらう。

「 もうほんとバカ……」

村上くんを好きじゃなくなる」とを悟悟する一方で、ソウタくんに嫌われたくないといつ気持ちがあることに気が付いたら、血口嫌悪で泣けてきた。

ソウタくんが帰ってきたら、どんな顔して迎えたらいいんだろ。とりあえず、赤い目はなんとかしないと……そこまで考えたところで、インターフォンが鳴つた。

＝＝＝＝＝

「つ……痛い」

ドアを開けると、ソウタくんはわたしの顔を見るなり、表情に怒りを滲ませた。左手首をギリリとひねり上げられる。そのまま部屋へ引っ張つて行かれた。

「痛いよ、ねえ」

「泣いてたんだ」

「え？」

「そりだよなあー。せっかくヨリが戻るかもしけなかつたのに、期
間限定の男にジャマされて悔しいよなあ！」

「そんなこと、」

「俺のことなんて気にしないでさ、あいつさトコ行つてきなよ。や
れで抱かれてくればいいだろ」

「何言つて……」

「けどなあー、賭けてもいい。ヨリなんか戻んないぜ。都合よく使
われて終わりだ」

「……っ」

「俺、あいつに似てる?」

「え……？」

「あいつに似てるから、あいつの変わりに、俺に好きになつてなん
て言ったのかー。」

「ちが……」

なんなの。全然わたしの話を聞いてくれない。

「俺もうムリだ。降りていい？　ああ、契約書には規定なかつたなあ。違約金でも取る？」

「それは、日割りで、」

「…つ冷静かよ！　つざけんな

なんなの。なんのなんなの！　全然話聞いてくれないで、怒つてるばかりで。謝ろうと思つてたのに。勝手に怒つて…！」

つかまれていた手を力任せに振り払つた。

「わたしだつて！」

叫んだら、ソウタくんがあ然とした。そりやそりや。わたしがいちばん驚いている。「こんな大声を出したのは子どものときの兄弟ゲンカ以来だ。

「…つ、わたしだつて、わかつてんだよ」

「…つ、見ていいかわからなくて、目を泳がせる。

「もう大丈夫だと思つたんだもん」

「そう、そうだ。」

「ソウタくんが来てから夜だって眠れるようになつたし。『はんもまともに食べられるようになつたし。ムリヤリ残業しなくて、夜家に帰るのが怖くなくなつたし。ソウタくんが来てから、もう大丈夫だつて思つたんだよ』

息継ぎだけしてさらに続ける。もうジャマされないよ、最後まで言えるように。ああけど、何を言いたいのか自分でもよくわからぬ。

「平気だつて思つたのに、あの人の顔見たら、もう体が、それでもいいつて、体だけでも求めてもらひえるなつて思つちやつて

わかつてゐる。自分でモバカだつてわかつてゐる。

「体だけでも……？」

ソウタくんがつぶやき、わたしは顔を上げた。視線がぶつかる。感情が高ぶつて、わたしはもう泣くのを止められない。

「……、心も体も求めやがこゆの……。」

「……。」

手の甲で涙を拭いながら、ふるふると首をふる。その手を、再びつかまれた。今度は優しく。

「やつぱり、あいつのところへ行く……？」

ブンブンと強く首をふる。

「行かない……」

「どうして？」

「ソウタくんの、言つ通つだと思つから。やつぱり、好きだった人がそんな男だなんて、思いたくない。」

「あいつのためってこと……？」

みたび首をふる。

「自分のため、だよ。だつて悔しこじやない。そんなやつを好きだつたなんて。それも、何年も……。」

「…過去形？」

「…伝えたら、伝わるだらうか。ぐちやぐちやここそこがうがつた
この頭の中を。

「ほんとはもう、あの人に未練はないの。未練があるのは、自分の
時間。あの人を好きだつた時間がなんだつたんだらうつて思つて。
ああ、けど理由はそれだけじゃなくて」

手に触れた言葉を、整理もせずにそのまま口から出していく。ソウ
タくんは黙つて聞いてくれる。

「んー…村上くんをもつ好きじやないつじことを認めちやうと、次
の恋ができなくなるんだよ」

ソウタくんが首をひねつた。

「…」めん、今のわかんなかった。もつかい

ええ？ そうだなあー。わたしも首を傾げながら答える。

「えーと、だから、村上くんのことをもう好きじゃないってことは、10年も好きだった人のことをカクカクに好きじゃなくなれるつてことだ」

「それでからとソウタくんをつかがう。とりあえず最後までどうぞ」と手で促されたので、続ける。

「もうなると、これから好きな人ができてもまた変わっちゃうってことで。今のソウタくんへの気持ちも変わっちゃうってことで。それはやだなあって思つて」

「ん？ 何言つてんだか、わたし。さうに首を傾げてしまは。けれどソウタくんは」ことを言つた。

「その論理はやつぱよくわかんないけど、一回だけ確認させてくれる？」

「なに？」

「要するに俺のこと好きなんだ？」

「な、え？ そ、えええ？」

けど。動搖の陰で、何かがストンと落ちた気がした。

要するに俺のこと好きなんだろ？」

泣き止んだばかりのまだ濡れた瞳を、まんまるに見開いて呆然とする。カナさんはヤバいくらいにかわいかった。あーキスしてえー。いや、まだだ。こりえろ、俺。まずはカナさんのぐちゃぐちゃの頭を解説してやることにする。

「カナさんは俺を好きなの。でもいつか心変わりするのが怖い。変わりたくないって思う。つまりずっと俺を好きでいたい。要するにカナさんは俺が好きってこと。わかった？」

「……はい。って、そんな簡単なことでいいの？」

「他に何が必要？ そりゃあずっと好きだった人をふしきりうとしたら少しぐらこさみしきくなつて当然さ。けど、それと俺を好きなこととは別物でしょ？」

「べ、別？ 別なの？」

「やうだよ。なに？ カナさんの胸は常に定員一人？」

「え、普通ちがうの？ なんて目を丸くしてる。いやいや。必ずしもそうではないでしょ。少し考え込むようなそぶりを見せたカナさ

んの思考回路は、こんなことを聞いてきた。

「ソウタくんち、今何人？」

そう来たか。まあそれもそうか。

「俺？ 今はカナさんだけだけど？」

「ふーん…彼女的なアレは…？」

「さすがに彼女いたら、金もらって恋人になるとかしないでしょ。そこまで人非人じゃないよ俺」

呆れて返すと、そりやそつか、と納得した様子。ああ、けど。俺は思い直して言い足した。

「ちやんと言つてなかつたね。彼女がいるかどうかって」

「や、いいよ、別にそんな話」

「何言つてんの。カナさんの失敗の原因でしょ」^うが

うぐ…といつ声なき声がする。

「彼女はいません。片思いとかも別ないです。女の子とは、正直ひと晩だけのつきあいも何回かしたことあるけど。ここ何か月かはしてないな。だから今はホントにカナさんしかいないよ」

ひとつひとつ、告げていく。それはカナさんに必要だつたはずのもの。そんなどこまで知らなくても……とボヤきながらも、同じようにカナさんも返してくれる。

「……つきあつたのは、ソウタくんで二人目。カラダの関係は、三人目、です」

「……」

それを聞いて、俺はこれ以上ないくらい複雑な顔をしたと思う。村上とかいうあの男のほかにもいたのか、とか、妙にリアルな人数つて逆に嫉妬心を煽られるなあとか。けれど「カラダの関係はソウタくんで『三人目』」というさりげない台詞が、それを上回る感情を波立たせる。今、俺を人数に入れた？ ヤバいよ、それ。止められないよ、もう。

そういうえば、カナさんの細い手首をつかんだままだった。途端に熱が上がる。

「カナさん？」

「ん…？」

「やつを言つたことだけじ。契約をやめたいって話」

あれ、本気だよ。俺もう、金とか関係なく力ナさんが好きだよ。力ナさんと本当の恋人関係になりたいよ。

……そつ、言つてしまひだつた。けど言えなかつた。力ナさんの目が、
△惑つよつて泳ぐから。

「…」めん、あれウソ。忘れて。俺まだ、力ナさんと一緒にいたい

明らかにホッとした表情に、胸がちくりと痛む。力ナさん、力ナさんは俺とどうなりたい？ 約束の期限が来ても、俺の恋人でいたいと思つてくれる？

それが聞けなくて。せめて自分の思いをぶつけるだけ。

「力ナさん」

「ん？」

「好きだよ」

「ありがと」

「…俺、本気だよ?」

「わたしも、本気だよ」

カナさんはきっと、信じていない。俺の“本気”を、きっと期間限定だと思つてゐる。掴んでいた腕をぐつと引き寄せ、彼女を抱きしめた。

「カナさんの言葉つて、どこのまで本当?」

「ぜんぶ本当だよ」

「…8月31日までは、でしょ? カナさんは、「大丈夫だよ」と言う。

「31日までは、わたしの言つことはぜんぶ本当。…9月になつたらぜんぶ嘘になるから。大丈夫だよ」

「俺は、本気だつて言つてるの!」

「だからわたしも本気だつて」

伝えても伝えても、受け止められないもどかしさ。仕方がない。猶予はまだあと半月ある。夏休みもあるし、それまでになんとかそうだ、夏休みがあつたんだ。カナさんの肩を掴んで身を離し、目を覗き込む。

「夏休みの旅行、決めよっか」

「……うんー」

ああ、やつぱり。その笑顔があればそれでいいや、なんて甘くもへタしな気分になってしまつ。だつてその笑顔、見ていると俺までふわふわしてしまうんだ。そしてその“ふわふわ”は、俺を幸せな気分にさせるのだから。

====

次の日、バイトに行くと、カウンターに腕時計が置かれていた。客の忘れ物だという。店長から「アルバイト全員に共有しといて」とメモを渡される。開店前のミーティングを仕切るのは、バイト歴のいちばん長い俺なのだ。

「あ、それからこれ

「なんですか？」

店長が差し出した紙を見ると、「正社員登用試験」の文字。

「これ……！」

「本部から、各支店で有望なやつがいたら推薦するように言われてんだ。もちろん推薦するだけで、採用されるかどうかは本人次第だが。まあ考えてみてくれ」

店長は開店の準備に戻っていく。
「どうか、しつかり考えてから返事をしろよ。」
そう言ことおいて、

「ソウタさん、そろそろ時間入けど」

後輩に呼ばれて慌てて紙をポケットにしまい、ミーティングに向かつた。

「あと今日は一点共有があります。昨日の貸し切りのお客様の忘れ物の腕時計を預かってます。今日取りにいらっしゃるそしたら、見えたらい俺に通してください」

ハイ、と、俺の次にバイト歴の長い男が手を挙げる。

「念のため、その方のお名前わかりますか？」

「あー……」

「ううこいつといふことよく気がつくやつなのだ。店長に渡されたメモを読み返す。しつかし汚え字……

「あつた。お客様のお名前は、村上様だ」

ムラカミ?

その口はしづらべりへ心こころありゅうだった。もちろん、心が多少留守でも失礼のない接客ができるくらいには、この仕事に慣れているといつ自負はある。いつだ？　こつ来る？

そして、やっと仕事に集中し始めた頃。

「ソウタさん、忘れ物を取りに村上様がお見えです」

「…………」

俺は緊張を隠せない面持ちで、村上の元へ向かう。恋敵の元へ。

「お待たせいたしました、村上様」

「きみは、原田の…」

「昨日はありがとうございました。お忘れ物の時計ですが、念のためメーカーと色をおしあつしていただけますか？」

忘れ物が高級品の場合、間違いなく本人に渡すために、いつもメーカーや形状を確認することになっている。それは、店として大切に預かっていますよ、というアピールもある。村上が挙げた名前に間違いないことを確認し、時計を渡した。

「…」

「ああ…ありがとうございます。きみは、原田と一緒にいた子だよね」

原田、ところのはかナさんのことだらう。

「昨日はお話し中にじじゃましてすみませんでした」

「いや…原田に彼氏がいたとはね。知らなかつた

「…俺、彼氏じゃないスよ」

え？ と、村上が驚いている。「れしそうなのがバレバレだつたりえ？ と、村上が驚いている。「れしそうなのがバレバレだつたりえ？」

「俺、まだカナさん口説いてるといりなんです。なかなかガード固くて。…村上さん、カナさんとはどんな別れ方だつたんです？ 俺が付け入る隙つてありますかね？」

わざと呟くべく聞いて警戒心をほじかせると、村上は「こと」を言つてきた。

「原田は難しいこと思つよ」

「…えうじてですか？」

「誘えば拒まない。友だちに戻るつと言えばあつさつ引く。正直、何考へてんのか最後までわからなかつたよ。あいつからほせいたいとも言わないし、誘つてもこないし、壁があるつていうのかな…真綿を抱いてるようだつた」

真綿のよつて、田の前にあるこの手が、指が、カナさんを抱いた。それは考へないことにする。

「だからさみも、あいつは難しいこと思つ

「それを聞いて安心しました

「えつ？」

挑むよひにヤことしてみせる。

“友だちづきあい”長いって聞きましたけど。俺のほうが力ナさんのことわかつてゐみたいだから

「なに？」

今頃氣づいてももう手遅だから、シャクだけど教えてあげますよ。カナさんが会いたいって言わないのは、断られるのが怖いから。友だちに戻るうつて言われて引き止めないのは、カナさんのことだから多分、別れたくないって駄々こねて嫌われるくらいなら、物分かりよくしてせめて友だちの肩書きを守らうとか考えたんじゃないかな

「それは、つまり」

「つまり、それだけあなたを好きだったってこと」

そう。夜も眠れなくなるくらい。『飯も食べられないほど』。

「やうだつたのか…」

「過去形、ですよ？」

「……っ」

「カナさん、俺には会いたって言つてくるし、いろいろねだつてもくるし。少なくともあなたといるより幸せに感じてもらえる自信はあるんで、もうカナさんにチョッカイ出さないでくださいね？」

「なつ……」

言葉を無くしてこの村上を、営業用スマイルで見送る。

カナさん、聞いて。俺この人に負ける気しねえ。早く俺のところへ来なよ。もう、傷つかなくていいから。

夏休みを取つた。土曜日から水曜日までの5連休。ソウタくんとの旅行は、多少なりとも混雑を避けて月火の一泊にした。

ソウタくんは、バイトのシフトが決まっちゃつたあとだつたらしく、2日間の休みをもぎ取るためにいろんな人とシフトチェンジをして、前日までびつしり働いていた。今までみんなの尻拭つてやってたから、交渉はカンタンだつたよ、なんて笑いながら。

ソウタくんのいない土日の2日間を、わたしはぐつたりと寝込んで過ごした。旅行には支障がないと思つたから、ソウタくんには言わなかつたのだけど。こんなことなら言つてしまえばよかつた。さらりと。ああもう、伝えるタイミングがつかめない。

ソウタくんが運転するレンタカーの助手席で、わたしは朝からずつと悶えていた。何について。つまり、その…何のことはない、生理中なのであります。わたしの場合、辛いのははじめの2日程度だけなので、この旅行にはほんとに何の支障もないのだけど。

もし。もしも、だよ？ 今夜そういう雰囲気になつたとしてだよ？ 寸前にそんな理由で断つたりしたら、わたしが関係を拒んでいると思つてしまふんじゃないかしら。かといって、会うなり告げても“それ”前提みたいで、勘違いすんなとか思われたらもういたまれないし。

「カナさん」

そう。彼に抱きしめられてから、わたしはもつともつと、その温もりが欲しくなつてしまつたのだ。キスしたい。抱かれたい。わたしにだつて性欲はある。それに何より、もしもこの先一生男ができるなかつたらあの人があ最後つてことになつてしまつ！ やだ！ ぜつたいやだ！！

…けど、ソウタくんにそれを求めるのは悪いことかしら。それも含めての契約だつて最初に言つてたし、そういうのできちやいそうなタイプだとは思うけど。期間限定の恋人とカラダの関係つて背徳の香り。何を今さら！ エーんだつて良心が。良心？ 良心と性欲が鬭つたらどっちが勝つのさ！ そ、それは当然：いやあるいはひょつとすると…。

「カナさん？ 酔つた？」

「え、えつ？」

「なんか静かだから。平氣？」

慌てて思考を振り払う。いかんいかん。

「ありがとう、大丈夫」

「カナさん、車酔いするほつ?」

「車の種類と運転によるかな」

なにそのプレッシャー、とソウタくんが苦笑する。

「ソウタくんの運転は心地いいよ。性格が出るのかね

「…俺、乗り心地いい?」

「? うん」

「…H口」

バツカじやないの!? ほんとにバカじやないの? 毒づきながらも、ちらりと横顔を盗み見る。免許を持っていないわたしは、車の運転ができる人をそれだけで尊敬してしまうのだけど。それが好きな人なら尚更だ。3割増くらいにカツコよく見えてしまう。

「…やつさから俺見てる?」

ソウタくんが前を見たままわたしに聞いてくる。「カナさんは俺が好きなんだよ」と、わたしに教えてくれた彼。本気でわたしを好き

だと囁いてくれる彼。

「うん。運転する姿がカッコよくて、うっとつしてた

「……俺、いまカナさんの命預かってんだからね？」

「うん？」

「そういう、ハンドルを握りを誤りかねないことを運転中に言わないでください」

照れて「うあ。ふふふ。じゃあ、車を停めてから言うね。わたしも好きだって。彼に指摘されてみれば、ストンと腑に落ちる。そうだ、わたしはソウタくんが好きなんだ。カラダの触れ合いを求めるほどに。」

けど大丈夫。勘違いはしないよ。自分で言に出したことはちゃんと守る。あなたが囁いてくれる愛も、「本気だよ」とて言葉も、期限つきのもの。ちゃんとわきまえている。ぜんぶ今月いっぱいの

「あ」

「ん？」

「8円って、半分過ぎちゃったんだ…」

11

ソウタくんは黙つてわたしの頭を撫でてくれた。片手はハンドルに残したまま…つてそれカッコよすぎです。

「ソウタくん、ハンドルしつかり持つて

え？

「わたし、ほんとは今日ソウタくんに抱いてほしかった」

一瞬、車がぐらつと蛇行する。

「ちょ、カナさん！」

声が怒っている。でも、いめん、言わせて。

「けじね、今日はできないの。ダメなの。それは、あのー…不可抗力、なんだけど、わたしが拒んでもと思われたらヤだなつて。そうじゃなくつて、わたしはもうソウタくんを求めてるんだつてことを…どうやって伝えようかと…ずっと考えてた、の…何言ってんだろううわたし」

尻すぼみに声が小さくなつてこべ。心つかしてゐる。じんな話、困らせるだけだ。「」。

「……」「聞いていいですか？」

かれどソウタくんは、うなずいたわたしに落ち着いた顔で「んなこと」を聞いた。

「それって、アレ…あの田口君とでしょ？」

「う、うん……」

「体調、だいじょ「うぶ」？ 車しんじくなー？」

……ソウタくん！ 真っ先の確認がわたしを氣づかう言葉だなんて。

「ありがとう、大丈夫。しんどい時期はもう「うじ」で終わつたから、もう全然平氣」

「よかつた。無理しないでや、休みたかつたらすぐ「うぶ」で、急ぐ旅じやないんだからさ」

「うふ……」

「えいこひつ。まあまあ好きになつたやつよ。まあまあ触れたくなつたやつよ。

「で、ふたつ皿」

「はー」

「なに、朝からずっと俺とのセックスのこと考へてたの？」

「もー」

「その言い方はちょっと語弊が……そりや間違つてはいけないナビをあ。

「それで上の空だったんだ」

「上の空……だった？」

「だった。と、断られてしまつ。くう……。いつなつたら開き直つてやれ。

「大事なことだと思つたんだよ。わたしはつゝ、カラダの関係イコール愛情みたいに考へてしまつから」

「えいこひつ……」

「体を求められて初めて、ああこの人わたしのこと好きなんだって安心できるというか。それがないと不安というか…だから反対に、体求められて断つたりしたら、わたしに気持ちが無いって思われちゃうのかなって…引いた?」

「出た、不幸思考」

不幸言つなつ！

「カナさん、それね。正解でも間違いでもない」

「じつこひ」とへ。」

今度はわたしが尋ねる。

「好きならそりゃあ抱きたいって思う。相手の体を求めるのは自然なことだよ? けどね、別に好きじゃなくても、体だけ求めることだってできちゃうから。だから、カラダの関係を愛情の物差しにしても、正しくは測れないよ」

「う…うだよね。ナビじやあ、ビツセヒたら安心できるんだね。」

「カナさん、それって一般論必要?」

「え？」

「そんなのケースバイケースなんだしさ。俺が力ナさんに対してどう考えてるのか。それがあればよくない？」

「たしかに… そうだ」

過去の経験を、なんでもかんでも教訓にしようとするクセがあるけれど。そんなの、毎回同じことが当てはまるわけじゃない。たしかに今必要なのは、ソウタくんがどう考えているか、だ。

「俺が力ナさんを抱きたいって思うのも、それをガマンしてるのも、どっちも力ナさんが好きだからだよ」

「…ソウタくん」

「なに？」

「運転中にする話じやなかつたね。『めん』

え、なに急に、打ち切り? なんてソウタくんが困つている。違うの。

「部屋に着いてからすればよかつた…」

「…え?」

だつて。今すぐ抱きつきたい！ そんなわたしの欲情を無言から読み取つたのか、いや運転中でよかつたよ、と彼は言つた。

「これがホテルの部屋だつたら、俺きっとガマンなんてできないもん」

「……」

渋滞じやなくてよかつた。流れる景色で気を紛らすことができたから。頬の火照りを抑えて、当たり障りのない会話に戻すまでに、わたしたちは少しだけ時間を要したのだった。

いつたい何の拷問かと思つた。ハンドルを切り損ねることなく、無事にホテルまでたどり着いた俺をほめてやりたい。

楽しみにしていたはずのドライブ旅行なのに、朝からなんだか力ナさんは上の空だった。車酔いでもしたかと聞けば、違うという。ひょっとして…以前、「カツブルが一線を越えるのは旅行が定番」なんて言つてたから、それを思つて緊張してる？

そんなの。俺は力ナさんが求めてくれるまで、いつまで待つつもりなんだから、心配ないよ？…って、早めに伝えて安心させてあげたほうがいいかな。けど「そんなこと考えてないよ！」と引かれてもヤだしな。

そんなことを考えていたところへの爆弾発言投下だった。

「わたし、ほんとは今日ソウタくんに抱いてほしかった

…ちょ、力ナさん…？　何を言ひ出すの…

話を整理すれば、要するに。生理中だから今夜はできないけど、ほんとはもう俺に抱かれたいって思つてる、ってことだ。ちょ、ほん

とにも一何の拷問！　あのね、いつまでだつて待つつもりだつたよ？　けどそれが、心はオッケーです。あとは体の準備が整い次第です。なんてカウントダウンされたらさあ！　そのほうがガマンがつらいや…。

「こんな話、部屋に着いてからすればよかつた」

それって、今一人きりの空間に移動したいって意味だよね？　助手席の力ナさんから、触りたい、触られたい、抱きたい、抱かれたい、という愁波がビシビシと飛んでくる。いつの間に、いつの間にそんな力ナさん！

ほんと、無事にホテルまで到着した自分を今日はねぎらつてやうつり。

＝＝＝＝＝

着いたのは、海岸沿いにある少し贅沢めのリゾートホテル。ふだんあまり金を使わない分、旅先ではケチらない！というのが信条の力ナさんの、たつての希望だ。予算を気にしたくないから、と、はじめは俺の分も出すと言つてくれたけれど、断つた。それくらい、ひねり出せば、なんとか。

滅多にお目にかかるないフレンチを食べ、珍しく力ナさんもアルコールを飲む。ほんのり赤く染まった力ナさんを連れて砂浜を歩けば、

満天の星。砂に足をとられて歩きづらそうなカナさんが、俺の腕をつかむ。そのまますべらせて、手をつないだ。

だからどいつもこいつもよつてたかって！ グルか。何の陰謀だ。俺に何させようってんだ！ 花火をするグループや家族連れが多かったのが幸いだ。人気がなかつたらヤバかった。

そんな、至福と苦行の境界線上を危なつかしく歩きながら、部屋に戻った。

「俺、風呂行つてくるけど。カナさんは……って、そつか

「うん、部屋のを使つよ。ゆつくつしてきて」

湯上がりのカナさんが、部屋で待つてる。そんな姿はカナさんちで何度も見てるじゃんか。なんで俺こんなに興奮してんだろ。落ち着け、俺。風呂上がり、意味もなくロビーで新聞なんかを読んで時間をつぶし そして気持ちを落ち着けて、部屋に戻る。ぱぱん、と頬を叩いてから部屋に入ると、カナさんはベッドの上で丸まって寝ていた。

一気に肩の力が抜けた。あのまま寝てしまつたんだろう、カナさんの服装はさつきと変わつていない。その寝顔を見ながら、買つてきた缶ビールを飲む……ウマい！

「いま何時……？」

カナさんがモソモソしだした。

「もうすく八時半

「そんなに寝起きったんだー…お風呂、入んなきゃ…」

言つたそばから静かになる。一度寝か…起こしてあげたほうが多いのか、寝かせておいてあげたほうが多いのか。うーんわからん。

「カナちゃん?」

そつと呼びかけると、ムニヤムニヤ言こながら身を起しす。まだボーッとしているみたいだ。焦点もなんだか定まっていない。

「…明日の朝でもいいかな。もうめんどくせー…」

「風呂? 別にいいんじゃねえの。そんなフラフラで風呂場行かれても心配だし」

「んー…ダメだ…顔洗わなきゃ…化粧だけは落とさなきゃ…」

あれ？ 会話じゃなくて独り言だった？ カナさんはベッドにべたりと座つたまま、ボケーッと起動中。俺はじわっとそばに寄つてみる。

「頭、覚ましてあげよつか？」

「お風呂つー 入つてぐるー！」

至近距離で覗き込む。彼女の顔にそっと手を添えようとした瞬間、

俺の脇をすり抜けて、バタバタと風呂場に駆けこまれてしまった。早まつた…。

そして小一時間後。ガチャリとドアの開く音がし、カナさんがこちらに声をかけてきた。

「ソウタくん？ 寝りやつた…？」

ベッドに横たわり、腹の上で手を組んでいる俺。眠れる森の美女か白雪姫かつづつこのポーズは明らかに寝たふりもいいところだ。けれどカナさんは何も言わず、そつと明かりを小さくしてくれた。

しばらく、ガサガサとカナさんが荷物を片付ける音がしていたが、それが止むと、隣りのベッドがギシリと鳴った。

あー、ツインでよかつた。それしか空いてなかつたからだけど、心底、ダブルじゃなくてよかつた。やれやれ、なんとか眠れるかな。なんてことを考えていたら、予想外の近さでカナさんの声がした。そして。

「ソウタくん… おやすみなさい」

「…」

瞬に、ほんの一瞬やわらかな感触。離れていくそれを逃すまいと、とつさに彼女の後頭部に手をかける。目を開けると、驚き流れる力ナさんの顔。

「起きてたの…!? あの、勝手なことして、『』の…」

謝つてなんてほしくない。彼女の言葉を遮つて、今度は俺からキスをする。深くはしない、触れるだけ。そのかわり、少し長めにゅつくつ数えて離す。彼女の瞳が揺れている。あー、もう一回。… うふ、もうひと声。ヤバい、止まんねえ。

結局、五回ほど唇を重ねたところで俺は初めて2人の体勢を思い出した。俺はベッドで寝ている。力ナさんは、それを上から覗き込んでいる。てことは、慌てて半身を起こすと、力ナさんはフローリングの床に膝立ちになっていた。

「「めん! カナさん、体勢キツくない?」

「膝が、ちょっと痛くなつて來たかな」

ベッド上を後退し、スペースを作ると、びつぞびつぞと招く。力ナさんは一瞬間を置いてから、「あ、じゃあ、おじやましまス」とベッドに上がってきた。

少しも待たずに抱きしめる。右手は力ナさんの腰、左手は力ナさんの後頭部。抱き枕のようにギュッと抱きしめた。あー、サイゴー!
だけどサイアク!!

「俺今すっげえ迷つてんだけど

「…何?」

「」のままガマンして寝るか、行けるといひまで行つちやつてもつ
とシリくなるか

俺の胸にまでこを預けていた力ナさんが、もそもそと動いて顔を上

げた。そして小悪魔のせめやれ。

「どうちみぢガマンしなきや いけないなひや。……やつたこと、し
よひへ。」

カナさんの唇が、ぱくつと俺の下唇をくわえた。

……わせるか！

大胆な行動に一瞬呆然とさせられたが、慌てて主導権を奪い返す。反対にカナさんの下唇をとらえ、丹念になめあげた。カナさんの手が、俺のシャツの胸元をくしゃりと掘む。吐息が、なまめかしく変わる。

これ以上進めばシラくなるのはわかつてこのに、止められなかつた。しばらく交わし合つていた唇と舌を離し、荒い息を整える。体はとつくに変化していた。どうやつて鎮めよ？ これ。

「…ふひ」

え？

「へつ…ふふ、あつははは…」

なになになに！？

「なんか面白ことあつた？」

突然笑い出したカナさんは心底おかしそうに、

「だつて、体がツラくなるのわかつてんのに止められないんだもん。わたしたちバカだなあつて」

「…カナさんも、体、ツラいの？」

「ツラい、よ…」

ホントだ。バカだ、俺たち。体に火をつけたつて消火する術はないのに。ただただくすぶる体を抱えて眠るしかないのに。けど止められなかつたんだ。

「ホント、バカだな」

一緒になつて笑い、彼女をギュッと抱きしめる。

「Mだね」

言いながら、カナさんが自分の足を俺の太ももに絡めてきた。

「…それはうだる」

「甘えてるだけです」

なんてかわいこことを言つて、おでこをすくつしつへる。やまびこだ！

「あやまち

たまらなくなつて、カナさんを抱きしめたまま寝返りを打ち、仰向けになつた。つまり、彼女は今、俺の上。

「お、重くない？」

「重みを感じたいの」

そ、そなだ、と言つて彼女は俺の上でしばりヘジジモジして、たけれど、やっぱり落ち着かないところの再びじりりと寝返りを

打った。もちろん、抱きしめたまま。すると彼女は、もそもそと動いて俺の首に腕を回した。相変わらず足も絡めてくる。

「抱き枕みたい」

「俺の抱き枕はやわらかくて気持ちいいけど？」

「わたしの抱き枕は、うーん……官能的でありながら安心感を『』える2WAY機能です」

「ふはっ」

じゃれあい、笑い転げる。こんなのが初めてだ。だって、女とベッドにいてするコトなんて、ねえ？ 限られてるじゃないですか！ そ
れが、ただくつづいて笑い合つてるだけでこんなに楽しいなんて。

今日カナさんが生理でいてくれて本当によかつた。でなければ今日は絶対シテしまっていた。けど、カナさん？ 僕決めたよ。カナさんと本当の恋人同士になれてから、カナさんを抱く。大切に、大切に。それまでは、これ以上しない。

「カナさん」

「ん？」

「すっぴえ好き」

「わたしも…」

「わたしも、なに?」

「つ……すつげえ、好き」

抱きしめても抱きしめても足りない。力加減がわからないほど、好きで好きでたまらない。

昼間、カナさんは「8月が半分終わってしまった」とつぶやいていた。俺たちの“恋人契約”は、あと半月。それは俺にとつては少し意味が違っていて。

本心からの告白をカナさんにできる日。そこへ向かうカウントダウンなのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1826v/>

有料彼氏

2011年8月17日09時14分発行